

IAUD Newsletter vol.2 第10号 (2010年1月号) 目次

1. 特集① : *towards2010* 岡本議長に聞く
 ～IAUDの活動を核に全国にUDのうねりを～ 2
2. 特集② : *towards2010* 国際 UD 会議プレイヴェント
 「しずおかユニバーサルデザインの絆 in 浜松」 レポート 8
3. Case study : 余暇の UD プロジェクト～ラリー・ゴールドバーグ氏記念研究会開催～ 18
5. 【UD2010 ウォッチング】 23

明けましておめでとうございます。いよいよ国際 UD 会議開催の 2010 年が幕を開け、実行委員会をはじめとした準備がヒートアップしてきました。昨年暮れには静岡文化芸術大学にて国際会議のプレイヴェントが開催され、IAUD も特別ワークショップや研究発表、パネル展示などを行いました。その他にもさまざまなプログラムが行われましたが、なかでも米国 IHCD からスティーブ・デモス氏を迎えた特別講演では満席の会場から参加者の強い熱気が感じられました。

年明け最初の特集 *towards2010* は、国際会議開催の年初にあたり IAUD 評議員会岡本議長にお話を伺いました。さらに特集②として、昨年 12 月に浜松で開催された国際 UD 会議プレイヴェントをレポートします。UD を世界に普及・推進し豊かに暮らせる社会づくりに貢献していくにはそれを強力に進める人のネットワークがカギとなりますが、今回の国際会議はそのネットワークづくりのための大切な場でもあり、心を新たにしっかり盛り上げていきたいと思えます。



「しずおかユニバーサルデザインの絆 in 浜松」特別ワークショップ「48時間デザインマラソン」表彰式

特集① : *towards2010*

岡本議長に聞く

～IAUD の活動を核に全国に UD のうねりを～



日 時 : 2009年12月18日(木) 11:00~12:00
場 所 : トヨタ自動車株式会社 東京本社 応接室
お話し : 岡本 一雄 (IAUD 評議員会議長)
聞き手 : 成川 匡文 (IAUD 理事長/情報交流センター所長)
川原 久美子 (IAUD 事務局長)

成川 : 本日は年末のお忙しい中、お時間をいただきありがとうございます。浜松でのプレイヴェントも無事終了し、いよいよ国際会議の年を迎えますが、本日は秋の本番に向けてお考えになっておられることを、率直にお伺いしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

岡本 : 浜松のプレイヴェントは皆さん本当によくやっていただき、おつかれ様でした。今回は特に開催地の皆さんが、期待していた以上にがんばってくださり、充実したプログラムで力が入った素晴らしいイベントになりましたね。国際会議の会場選びではいろいろ経緯もありましたが、浜松市に決めさせていただいて本当に良かったと思っています。

確かにこういう経済状況の厳しい時期に国際会議のようなイベントを開催するのは大変ですね。東京モーターショーのような大きなイベントでも、今回は海外からの出展が減り、来場者も半分以下に激減しました。しかし、いろんなイベントを見ていますと、お金が無い方が結果的には良かったという場合もありますね。お金が無いと自分の頭で考えますからそれだけ思い入れが強くなり、豪華ではないけれど心のこもった感じが出て、かえっていいんじゃないかと思います。自動車技術会が主催している「キッズエンジニア」という小学生を対象にしたイベントがあるのですが、これもお金が無くて大変でしたけれど、皆さん手弁当で協力してやってくれて、すごく良かったですね。これからの IAUD のイベントでも基本的にそういうところを考えていく必要があるんじゃないでしょうか。



成川 : 浜松のプレイヴェントには2006年の京都の国際会議を経験されていない理事の方にも参加していただきましたが、研究開発企画部会の各プロジェクトや48時間デザインマラソ

ンの発表を聞いたり企業展示の会場を見たりして、次第に国際会議の実感がわいてきたとおっしゃっています。

岡本： ミーティングをしているだけでは臨場感もないですね。そういう意味では、ああいう発表の場は色々な人達の反応も見られますし、面白いですよ。

成川： 今度の国際会議は手づくりでといわれても具体的に何をすれば良いのかよくわからなかったけれど、実際の様子を目の当たりにすると何を手配すればいいのか、どういう段取りが必要なのかがわかって、少しずつやる気が出てきた、参加して本当に良かった、という感想を何人かの理事からいただきました。



川原： 開会式の前に浜松市長から、出席した理事の一人一人に丁寧なご挨拶をいただきました。すると、市長も一所懸命なんだから理事の自分たちも一所懸命にならないといけないと、皆さんも感じていたようです。

岡本： 本当にそうですよね。浜松市は街全体というか、地元の皆さんがものすごく前向きですよ。アクトシティ浜松の、会議場から地下の商店街を通過して展示会場へ移動する途中の雰囲気もあまり気にならなくなってきましたでしょう。

川原： 48時間デザインマラソンの打ち上げを地下街のあるお店で行ったのですが、来年国際会議を開催するというので、お店もすごく協力的でした。親近感があっていいですよ。

岡本： そう思いますね。最初はあの地下街が気になっていたんですけど、国際会議がせまってくると何も無いところよりは、かえって賑やかで良いように思います。アクトシティ浜松の地下街から駅の地下街へとつながり、そして、まち全体に広がって浜松市全体が盛り上がるのがUDなのかもしないですね。そういう意味では頭の中で考えている理想と、進めていかなければいけない現実のズレが、実体験によって次第に修正され正しい方向に向かっているのでしょうか。きっと横浜で開催した時は理想に燃えていて、次の京都では自分達でイスを運びなさいと言われて(笑)、でも皆さんずいぶんがんばってましたよね。会場の京都国際会館は昔の建物だから、会館側に無理を言って、できる限りUD対応にしてもらったりしました。そういう過程がだんだん身になっていくんじゃないですかね。本当にいい方向に向かっているような気がしますね。

川原： 京都の時は、当然、私達是一所懸命でしたけれど、受け入れ側の京都市も一所懸命でした。今度も静岡県と浜松市の自治体の方々が一所懸命で、それはすごくいいですね。

岡本： それとアクトシティ浜松の会場自体がUDに対して一所懸命取り組まれているのでしょうか。

川原： そうなんです。アクトシティ浜松の改修工事を含め、市全体で国際会議を受け入れるための街の整備に相当な費用をかけたそうです。

岡本： やっぱり、国際会議はそういう熱心に考えてくれる所と一緒にやりたいな、という気がしますよね。

成川： 何かの機会に、アクトシティ浜松と自治体は国際会議のためにこんな協力をしてくださいといった話をこちらからもPRすべきですよ。

岡本： それはものすごく大事だと思いますよ。

川原： 理事の皆さんで下見に行った際に、トイレの鏡がUDではなかったので、そのように関係者に伝えましたが、その後ただちに全部改修されたそうです。

岡本： そういうのを我々側からもちゃんとアナウンスしてあげると、次の会場を提供くださるところからも同じように良くしていただけたと思いますよね。そうやっていろいろなものが改修されていけば、社会全体もいい方向に回っていくし、それはUD普及の本来の目的の一つでもあるわけです。

川原： そのようにして全国津々浦々を回り、まだUDに気づいていないところを掘り起こしていくということでしょうか。

岡本： 会議を開くだけがIAUDの目的ではない。最終目的は何ですか？と時々言ってきましたが、会議を開いたり、パンフレットを配ったり、何かの基準を作ったり、きっとそんなことだけじゃなくて、世の中全体が特に意識しなくてもUDになっていくのが本当の目的なんじゃないでしょうか。それを強制的ではなく、自然に行えるといいと思います。

川原： 今まさにそういう感じですね。プレイヴェントがあって、静岡新聞などにも結構とりあげていただいたりしていますので。

成川： 国際会議をやり、そのイベントを契機に街にUDの芽が生えてきて、我々が去った後もどんどん成長している、というようなことをあちこちでやっていって、IAUDはこういう足跡を残しましたと言えるようになれば素晴らしいと思います。

岡本： そうなっていくといいですね。会議が終わった瞬間にハイさよなら、では少し寂しいです。

川原： そういう意味では浜松はぴったりのサイズだったのかもしれないですね。

岡本： 地方都市で開催したり、大都会でやったり、また別の地方都市へ行くと、開催場所についてはこれからいろいろ考えていかなきゃならないですね。

成川： 転々と場所を変えて開催することと、一方で行政と一緒に仕組みをじっくり作りこんでいくことが同時で進行していく、これが理想だろうと思います。いろいろと難しい点はあるでしょうが。

岡本： 確かに難しいけれど、今回だってこんな厳しい状況の中で開催するわけですから。

川原： まだ非公式なのですが、九州のある自治体から次の国際会議の誘致がありました。浜松市が静岡県と一緒に取り組んでいるのを見て、ぜひわが街で開催したいと考えられたようです。次回開催は、4年後まで待たなくてはいけないのでしょうかともおっしゃっています。



岡本： 九州はいろいろな意味で活性化していますよね。特に福岡市と北九州市が結構がんばっている。北九州市はIT立国を作りたいと思っているようです。大学や企業を誘致してIT産業の核になることで、まちおこしに繋がりたいと考えている。お互いに結構張り合ってい

るから、九州で国際会議を開催するのはものすごくいいことかもしれないですね。

川原： 先方はアジア圏を意識していて、国際会議を海外の自治体と結んで開催したいと考えているようです。国際会議を誘致することでまちづくりが変わっていくのではと、浜松市の取り組み方を見ながら、その成果を期待しているようです。

岡本： そうでしょうね。オリンピックでも、誘致すると、イベントを行うだけではなくて、実際にまち全体が変わるじゃないですか。それと同じように国際会議を開催することでUDがそこに根付き、まちが変わる。そのように国際会議を利用してもらうことは、ものすごくいいことですね。

川原： なぜこの国際UD会議を誘致したいのですかとお聞きしたら、UDというキーワードにはネガティブな要素が全くない、だから関係者を説得しやすく、誘致しやすいのだと先方はおっしゃっていました。

岡本： UDは体が不自由な方のためだけというのではなく、健常者にとっても有効ですから、概念としてはとてもいいですよ。本当はそれが当たり前で、何も言わなくてもいいような時代になるといいのですけれどね。車なんかでも「UDです」って一所懸命旗を掲げなければいけないようではきっとダメなんですよ。さらっと「えらく使いやすいね、何でこんなに使いやすいの?」「いや、UDのいろいろな知恵と工夫が入っているんですよ」と本当は言えるのが一番いいですよ。自分でUDのポイント何点何点とチェックしているうちは、まだまだですね。

川原： UDがそこまで広がってしまうとIAUDも目的を達成して解散するのでしょうかね。

岡本： IAUDが永遠に同じスタイルで続いていくというのはないでしょう。ただ、世の中全体が自分たちが最初に思っていたあるステップに到達したら、また違うステップに進めばいいわけです。それを考えられないような事務局だったらダメですね。(笑)

川原： 米国のアダプティブエンバイロメント、今は名前が変わってヒューマン・センタード・デザイン研究所ですが、代表のヴァレリー・フレッチャーさんが、「UD商品の普及には日本でIAUDが頑張っていて、エコを含むサステイナブルデザインの概念もだんだん浸透している。私たちは中東のヨルダンで国際会議を開催すべく検討している。」とっています。2004年にブラジルで国際会議を開催したのは、発展途上国と先進工業国との関係をUDの視点で考察するという理由からでした。今度は中東問題に人間中心デザインの視点からアプローチしたいと考えているかのようです。

岡本： 中東というとなんとなく宗教や政治が絡みそうですね。宗教の違いを乗り越えるのはいい試みだと思います。ただ、欧米の人達の狙っているところと、日本の狙うところは違っていてもいい。

川原： 考えることはたくさんありますね。

岡本： まだいっぱいあるんじゃないですか。同じ形態でいくかどうか、その都度よく振り返りながら検討していかなければいけないと思います。

成川： ともすると毎年同じような計画で活動が続いていて、はたと気がついたら自分達は何をしているんだと気付くようではいけませんね。

岡本： 国際会議だけが目的だというようなことになりがちだと思うのです。2003年に発足してから来年でもう7年。成果を何に求めるかなのですが、アワードのような姿、形のあるものに求めるのか、そうではなくて、先ほど言われたように次の国際会議の開催候補地が名乗りを上げるようになってきたことだけでもすごい成果だと思うんですよ。行政でかつて、何か事を始める時にはまず箱ものを作って進めていったことがありましたが、それ



と同じように進めると、どこかで行き詰まるかもしれないですね。その辺はこれから皆さんで良く議論をしながら決めていって欲しいところです。最近「ものの豊かさ」より「心の豊かさ」とよく言われていますから、「心の豊かさ」が満たされるようなものをちゃんと IAUD で提案し続けていければ、それはものすごいことだと思います。ただ、規準や表彰制度を作成することは、わかりやすいですが、まちが変わることはもっとすごい成果だから、国際会議を開催することで意識が変わり、その結果、まちも UD 化して変わっていく、日本全国津々浦々そうならいってたら素晴らしいことですよ。

成川： そういった活動をしていくのだということのをうまく文章化できるといいのですけれど。

岡本： 文章化するのがいいのかも議論してもらいたいです。48時間デザインマラソンもとてもよい取り組みですよ。これに参加した人達が日本中で育っていくわけでしょう。彼等がまた自分達で48時間デザインマラソンを各地で開催できるかもしれない。

成川： 48時間デザインマラソンを監修していただいている金沢美術工芸大学の荒井先生も、このイベントは一つの教育だ、参加者が増えてくることが大事で、それ自体に意義があるとおっしゃっています。また、48時間デザインマラソン・マスターコースの設立も提案されているようです。IAUD でなければできない独自の教育であり、学校ではなかなかできないようです。いずれ参加者達が自発的にあちこちでいろいろな活動をしてくれることが IAUD としてのさりげない社会貢献ですね。

岡本： そうなればすごいですね。

成川： 48時間デザインマラソンをやってよかったという参加者の実感があるので、準備する方も結構大変ですけど今後とも継続していきたいと思います。

岡本： 話は少し違いますが、いろいろなものの評価尺度というのは必要だと思うのです。例えば車のレースで言うと、米国に NASCAR というのがあります。オーバルコースをぐるぐる走り回るだけの単純なレースですが、米国人はとても好きなんです。ものすごくたくさんの観衆が来る。米国人はそういうことをチェックしていて、その NASCAR で勝ったか負けたかで販売店に来るお客さまの数が変わるのだそうです。レースでトヨタ車が勝つとトヨタがこれだけ増えたといったデータが、きちんと取れてくるんです。48時間デザインマラソンでも実施してよかったね、漠然と終わるのではなく、どれだけ輪が広がったか、その成果がどうやって生かされたか等、きちんと示されるようになるだけでも随分変わるでしょう。参加者が先生になって、今までとは違う所で開催したり、また更に、その後どれ程自主的に広がったかを検証したりできるといいのではないのでしょうか。

成川： 話は変わりますが、岡本議長が IAUD に関わられるようになったのはいつ頃からでしょうか。

岡本： 会社に前議長の戸田さんが訪ねていらして話をいただきました。トヨタの社内でも評議員を出そうということになり、私がちょうどデザイン担当だったので評議員を受けました。

最初に出席した会議でいきなり戸田さんから副議長になれと言われて、「えっ」。(笑)

その後、戸田さんが退任されて、今度は議長をやれと言われて、「えっ」ということが二度ありましたね。(笑)

IAUD 総裁の寛仁親王殿下とお顔を合わせるようになったのは私にとってはとても幸運でした。寛仁親王殿下には東京モーターショーの総裁もお願いしていますので、モーターショーに来られた時には、私がお案内いたしました。面識があるということはとてもいいですね。殿下もすごいですよね。ご発声が困難になられても「UD 大会 in 東海」では人工咽頭を使ってご挨拶していただきましたから。こういう活動にける殿下の情熱はすごいと思いますね。



成川： 理事の皆さんにも例えば IAUD の法人化の検討や研究開発企画部会、48 時間デザイン馬拉ソンなど、一所懸命活動していただいています。皆さんそれぞれの要職にある方々なので、あれこれやっていただく訳にもいかないのですが。ありがたいことです。

岡本： 皆さん自分の仕事もしながらですから、大変だろうと思います。それでも随分頑張っているから、IAUD の活動はきっといい活動なんですよ。

成川： そういう意味ではプレイヴェントなどの現場をちゃんと見ていただくと、皆さんの意識もどんどん高まるでしょう。また、寛仁親王殿下のお話がありましたが、殿下がどう考えていらっしゃるかを直に聞いてみたかったので、Newsletter でインタビューをさせていただきました。戸田前評議員会議長をはじめ、設立当初、情熱をもって設立にあたった方々のお話も掲載していますが、そういった努力は今後も続けていこうと思います。最後に Newsletter の読者、IAUD に対して今後望まれることや叱咤激励などありましたらお願いいたします。

岡本： IAUD の活動はとてもいい活動だと思います。先ほど言ったように皆さんは大変だろうとは思いますが、各社では活動していても、こうやって日本全体でまとめて活動していく核がないですね。IAUD が核になって大きなうねりとなっていくような協議会になるといいと思います。それには「心」がとても大事ですから、それをいかにいろいろな所に残していくか、また同時に、それがどんな形で残っているかをきちんと検証しながら活動していかなければいけない。ともすれば散漫になりがちですが、やはりやりっ放しはよくないので、それらに注意しながら、これからも末永く取り組んでいただきたいと思います。

成川・川原： 本日はお忙しいところありがとうございました。



特集② : *towards2010*

第3回国際 UD 会議 2010 プレイヴェント

「しずおかユニバーサルデザインの絆 in 浜松」



フィナーレで「第3回国際ユニバーサルデザイン会議 2010in はままつ」に向けたメッセージを発信

浜松市で今年10月開催される国際UD会議のプレイヴェントとして位置づけられたこのイベントは、静岡文化芸術大学キャンパスを会場に12月4日、5日の2日間にわたり開催されました。初日は日差しも暖かだったものの、2日目の土曜日は冷たい雨がパラつく生憎の空模様で、一般の方の来場が心配されましたが、2日間の全プログラムのべ来場者数は約2,500名と、国際会議の開催に向けてまずまずの手ごたえが感じられる状況でした。

『多様な個性の存在と多様化する世界の中で、互いに「気づき」→「考え」→「行動する」ユニバーサルな社会づくりが求められています。このような社会の実現を目指し、ユニバーサルデザインに対する市民の一層の関心と理解を深め、情報発信します。』という開催趣旨のもとに硬軟織り交ぜたプログラムが展開されました。

IAUDは共催者として研究開発企画部会の活動を中心に発表とパネル展示を行いました。また、IAUD主催の特別ワークショップとして「48時間デザインマラソン」を会期の前日3日から開催し、2日目の5日午後、その発表と表彰が行われました。

同じ会場では企業や教育機関、UD団体などの展示ゾーンも設けられ、約20社・団体の取組みが実際の製品やパネルで紹介されました。

以下、イベント会場の様子をプログラムの順を追ってご紹介します。



12月4日(金)

<開会式>

川勝静岡県知事のあいさつ文が伝えられた後、鈴木浜松市長がごあいさつされ、祝辞と2010年の国際UD会議に向けた期待と決意を述べられました。続いて、主催者を代表して杉浦UDフォーラム実行委員長が登壇され、今回のイベントの主旨と概要が紹介されました。話のなかで、イベントのタイトルに「絆」という言葉を使ったことについて、施設や枠組みをつくるだけでなく、そこに一人ひとりの小さな力や考え方を取り入れていくことが大切で、一人ひとりがつながり絆をもって事を進めたい、と述べられました。



<記念講演> 「誰もが暮らしやすい高齢社会への提言」 講師：樋口 恵子 氏 (評論家)

介護保険制度の創設に深く携わり、日本の介護のあり方を長年にわたり考え続けてこられた樋口氏の、ジョークを交えながらも辛口でパワフルなお話は、2階席までほぼ満席となった参加者を惹きつけていました。

急速に進む少子高齢社会に向けて、男女ともに自立して誰もが暮らしやすい社会をつくるにはどうすればよいのか、現実をしっかり受け止めるとともに、人生50年を前提とした古い社会制度を、人生100年型の新しい社会システムにつくり変えていくことの重要性を主調されていました。



若い世代と同じように
賞金競争しなくてもいいのでは。
一定の年金も自分の積立金以上に
次の世代によって支えられているのだから
若い世代の賞金のようになくてもよい。
年よりは寛裕すべきでしょう。
趣味で後の人生を埋めるのは無理。

家政大学の
名誉教授ですが大学へ行き
久しぶりに大学で話しました。
老婆は一日にやらせると
言ってきました。
人生100年社会という
文明を創造しなくてはならない。



<パネルトーク> 「次の世代に今できること」

パネリスト：樋口 恵子 氏 (評論家)

赤池 学 氏 (ユニバーサルデザイン総合研究所 所長)

原田 博子 氏 (はままつ子育てネットワークびっぴ理事長)

高野 裕章 氏 (富士宮市都市整備部都市計画課)

コーディネータ：古瀬 敏 氏 (静岡文化芸術大学 教授)

各分野で活躍されているパネリストからそれぞれの実践事例が紹介され、誰もが暮らしやすい社会をつくるため、今わたし達に求められていることを、IAUDでもおなじみの古瀬教授がコーディネーターとして、会場からの参加者とともに語り合われました。

赤池氏は「ユニバーサルデザインの新しい潮流」と題し、氏が提唱するUDを定義する要件やキッズデザイン協議会の活動などが紹介された。原田氏からは「NPO法人はままつ子育てネットワークびっぴ」でのWebを中心とした

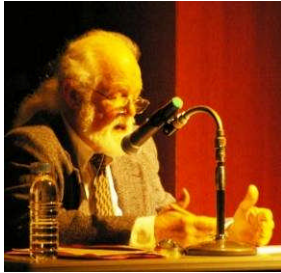


地域のネットワーク事業などが紹介された。高野氏からは自治体の取組みとして、少子高齢化の進展に対応した地域の公共交通での事例が紹介された。

各氏のお話について会場参加者からの質問や意見交換が行われましたが、会場からのさまざまな質問や意見に対して、次の特別講演の講師でもあるスティーブ・デモス氏が発言される場面があるなど、熱のこもった意見交換が行われました。



<特別講演> 「UDの来し方、行く末」 講師：スティーブ・デモス氏（米国・IHCD）



現在、米国のヒューマン・センタード・デザイン研究所（IHCD）に所属されているデモス氏からは、1990年代以降の米国でのUDの進展を同時期の日本の状況と関連付けて概観され、IHCDの取組みの最新情報などが紹介されました。UDは建築や都市計画から、製品開発、教育、政策まで幅広く関わるテーマであり、その概念は3つの持続可能性、すなわち環境や経済だけでなく社会全体の持続可能性まで含めた枠組みに入れて考えていく必要があると説か

れました。また、IHCDの活動として2011年にヨルダンで国際会議開催を計画していることが発表されました。これまでの会議は主に高齢化が進む先進国で行い、21世紀に発展が見込まれる国にはあまり関心を払ってこなかったが、2011年の会議では中東や北アフリカのニーズにあったものにしたということです。



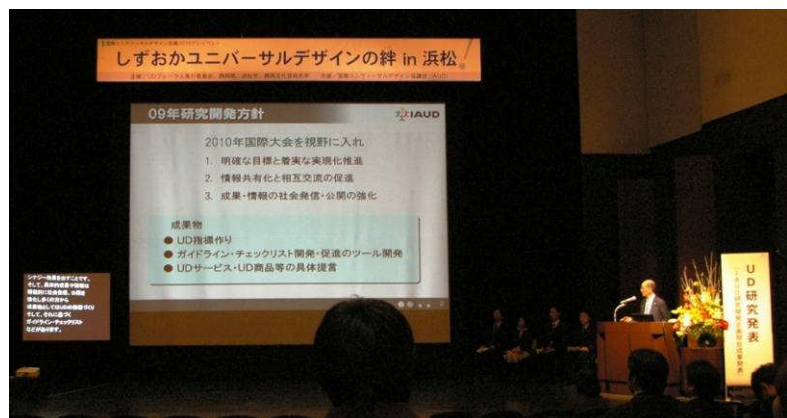
<UD 研究発表（IAUD 研究開発企画部会成果発表）>

初日、最後のプログラムとして布垣理事の進行により IAUD 研究開発企画部会の各プロジェクト、ワーキンググループの活動報告と2010年の国際会議開催に向けての取組み計画が発表されました。

具体的な活動紹介に先立ち、成川理事長から IAUD の全体概要を紹介し、大澤研究開発企画部会長から部会全体の活動概要が紹介されました。

各プロジェクト(以下PJ)、ワーキンググループ(以下WG)の発表は2部構成で行われ、前半は衣食住といった暮らしに密接な関わりのある4つのPJ[住空間PJ、衣のUDPJ、食のUDPJ、余暇のUDPJ]、後半はより公共性の高いあるいは共通的なテーマをあつかう4つのPJ・WG[移動空間PJ、労働環境PJ、メディアのUDPJ、標準化研究WG]から発表が行われました。各PJ・WGの発表内容は、これまでの活動概要と国際UD会議に向けた活動計画の2点を中心に行われました。2部構成の中間と発表後の2回、会場参加者の質疑応答の時間が設けられましたが、地元の自治体関係者からも現実的な課題に関する質問が寄せられ、充実した意見交換が行われました。最後に大澤部会長から全体を総括し、IAUD入会とプロジェクトメンバー募集を呼びかけてプログラムを終了しました。

以下、各PJ・WG発表のポイントを簡単にご紹介します。



●住空間 PJ 平井 伸佳 パナソニック(株)

これまでの活動概要：誰もが心豊かに暮らせる住空間づくりを目指し、先端事例の視察や、ユーザーとのワークショップなどの活動を通じて「UDプラス」とよぶ、新たなUDコンセプトの研究に取り組んでいます。

国際 UD 会議に向けた活動計画：デザインによる環境や機会の提供がモチベーションを高め効用をもたらすという仮説の検証を、大学との共同研究で進め、「UDプラス」の住まいの評価軸やガイドラインなど客観的指標づくりを進め、使うことで「鍛えられる」「楽しい」というUDの新たな視点を提言していきます。



●衣の UDPJ 一色 香月 スリーエムヘルスケア(株)

これまでの活動概要：ジャージの服としての快適性や機能に着目、「その機能は美しいか」をコンセプトにさらに機能的でおしゃれな服づくりを目指し、素材やデザインなどのアウトラインを設定しサンプルを作成中です。

国際 UD 会議に向けた活動計画：サンプルを実際に多くの人に試着をしてもらい、着脱のし易さや着心地などの体感面からの機能的評価と、おしゃれ感やデザイン性に関するアンケート調査を行います。さらには、衣服の着脱における身体にかかる負担について生理学的手法を用いて数値化することを検討します。



●食の UDPJ 古田 晴子 大日本印刷(株)

これまでの活動概要：食品、飲料メーカーの共通テーマとして表示の共通化を目指し、食品パッケージやUDとエコロジーの関係を探るWeb調査を実施し、成果として「やけど注意」のピクトグラムを開発、公開しました。

国際 UD 会議に向けた活動計画：これまでの調査結果を一般公開し共有化を図るとともに、業界を横断する課題解決のため今後とり組むべきテーマを探っていきます。また、「やけど注意」のピクトグラムを食品や家電メーカーに広く使用していただくために、評価結果をまとめアピールしていきます。



●余暇の UDPJ 原田 保 (株)NTT データ

これまでの活動概要：「うれしい」「楽しい」「面白い」をテーマに余暇生活が充実する社会づくりを目指し、「CM字幕の実現」と「誰もが楽しめる旅の実現」の2つをテーマに調査や提案活動に取り組んできました。

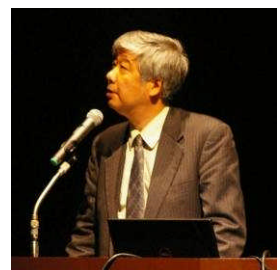
国際 UD 会議に向けた活動計画：CM字幕の実現では、スポンサーである企業と関係団体の連携強化を働きかけます。また、Web上でのCM情報充実のため、現状分析を進め企業に呼びかけます。誰もが楽しめる旅の実現では、交流や親睦、共に旅する仲間との語らいに着目し取り組んできています。



●移動空間 PJ 和田 紀彦 (株)日立製作所

これまでの活動概要：公共交通機関において情報の継ぎ目のない移動環境を目標に、交通事業者・自治体などが使える課題抽出の調査手法を検討しています。現在、静岡県、浜松市と協力し静岡駅周辺の調査を実施中です。

国際 UD 会議に向けた活動計画：実施中の静岡駅周辺の調査では、調査結果をまとめ具体的な改善提案と指針づくりに取り組み、国際会議での提言を目指します。また、移動情報調査手法のさらなる改善に取り組み、IAUDのWebサイトでの公開と、その後の意見をまとめて報告を行います。



●労働環境 PJ 室井哲也 (株)リコー

これまでの活動概要：様々な人が気持ちよく働ける労働環境実現を目指し、働きやすさ、コミュニケーションの観点から会議のUD、最近ではオフィスのセキュリティをテーマに個人認証の実態把握と分析に取り組んでいます。

国際 UD 会議に向けた活動計画：オフィスにおける個人認証の問題解決を目指し、課題の整理と解決方法についての提言を行ないます。さらに、働きやすさとセキュリティが両立する創造的オフィスの実現を目指します。



●メディアのUDPJ 伊賀 公一 NPO 法人 CUDO

これまでの活動概要：教育研究機関や行政政府機関とも連携し、社会に対してメディアの情報保障に関する提唱を目標として活動しています。現在はカラーユニバーサルデザインにテーマを絞り、見学会の実施、当事者へのインタビュー、カラーハザードの抽出などを行っています。

国際 UD 会議に向けた活動計画：カラーUD 教育や標準化を視野に入れ、第一段階として情報弱者を生まないための課題発見と対応策を検討し、クリエイター団体、教育機関へ、将来的には行政やコンテンツホルダーへの発信を行っていきます。



●標準化研究 WG 松田 崇 NEC デザイン&プロモーション(株)

これまでの活動概要：IAUD 会員各社で活用できる UD の標準化推進と、社会で広く活用できる標準化提案という目標のもと、開発現場で使い手の理解を深めるためのツール「UD マトリックス」の研究に取り組んできました。エクセル版と Web 版は会員公開済みで、現在冊子版の準備を進めています。



国際 UD 会議に向けた活動計画：「UD マトリックス」の各ツールについては利用者のご意見をもとに改善や情報追加に取り組みます。また、国際化対応として海外情報の追加や英訳を検討し、一般に公開する方向で準備を進めています。



<交流会>

4日のプログラム終了後、キャンパス内食堂において参加者やイベント関係者を対象とした懇親会が催され、国際 UD 会議開催にむけて交流が図られました。

○12月5日(土)

<しずおかユニバーサルデザイン大賞授賞式>

静岡県が主催する「第10回しずおかユニバーサルデザイン大賞」の表彰式と大賞受賞者による作品発表が行われました。一般の部の大賞に選ばれた静岡文化芸術大学デザイン研究科の松田優さんの作品は、視覚障害者のラジオの使用状況から課題を見つけ、電源、音量、チャンネルの操作がひとつの操作バーで行えるラジオの提案です。



推進活動の部では IAUD 会員でもある (株)リコー 沼津事業所の色覚の多様性に配慮した取り組みが受賞しました。各部門の大賞受賞者は次のとおりです。

子どもの部：静岡市立西豊田小 6年 鈴木彩乃さん

「目と鼻と耳の時計」

中学生の部：富士市立富士中 1年 平井公玲さん

「光の信号機」

一般の部：静岡文化芸術大学デザイン研究科 松田優さん

「ALL IN ONE」

推進活動の部：(株)リコー沼津事業所

「色覚の多様性に配慮したカラーユニバーサルデザイン活動」



<特別ワークショップ「48時間デザインマラソン」の報告>

記念講演やパネルトークが行われた前日の12月3日（木）から5日（土）までの3日間にわたって、IAUD主催の特別ワークショップ「48時間デザインマラソン」が同大学内で開催されました。特別ワークショップも回を重ねるにつれ内容が充実し、IAUDが主催するイベントの大きな顔ともなってきました。

金沢美術工芸大学の荒井利春教授の全体監修のもと、障がいを持つユーザー、IAUD会員および静岡在住のデザイナー、学生ボランティア、運営サポーターなどからなる5つのチームが結成され、当日発表されたテーマに基づき48時間という限られた時間内での競争設計を行いました。今回のテーマは「浜松のフィールドからユーザーの切実な問題をチームで共有し、デザインリアリティーとマーケットリアリティーのある新たなデザインを創出する。フィールド+発想+かたち」でした。

初日午前中のオリエンテーションが済むと、各チームは浜松の街中へフィールドサーベイに出かけて行きました。最初は少し雨模様だった天気も時間が経つにつれて小降りとなり、最後は青空が雲間から見えるほどでした。循環バスで大学前から浜松駅まで行くチーム、ユーザーを先頭にして街中まで徒歩で移動するチーム、行き先もショッピングセンターやイベント施設、歓楽街と多種多様でした。中には「これまで気になっていて行ったことがないレストラン」にメンバーを先導するユーザーもいました。ユーザーを先頭にした数人からなる5つの集団が、浜松の街中に出発しました。メンバーはユーザーと共に実際の生活現場へ出かけ、様々な問題点を現地現物で確認し、体験を共有して帰ってきました。そしてそれぞれの部屋に戻ってデザインの総合化とプレゼンテーション資料の作成という作業へと本格的に入ったわけです。今回初の取り組みとして、学生ボランティアによる各チームサーベイ現場の報告を全体交流会として実施、各チームから興味深い体験レポートが報告されました。浜松ギョーザの偉大な存在を皆で共有したのもこの機会でした。

2日目は屋内で仕事をするのが勿体ないような良い天気でした。雲ひとつない青空のもと、遠くには富士山の美しい姿を望めるほどの快晴でした。チームが作業する全ての部屋からは、今回も熱いディスカッションの音が聞こえてきました。早々に目標を設定して役割分担を決めて作業を進めるなど、「デザインオフィス」のようなチームもありました。また他のチームと比べると作業がスムーズに進まず、あせった顔ばかりのチームもありました。時間はどんどんと過ぎていきます。チームの作業は夕食の後も行われ夜遅くまで続いたところかほとんどで、睡眠時間も余り取られていないのではないかと思える状況でした。しかし3日目の5日（土）の締切り時間までに、全てのチームがメンバーそれぞれの気づきを生かしたデザイン提案を立派にまとめて提出しました。その底力には感嘆するばかりでした。



午後には場所を講堂に移して、提案デザインのプレゼンテーションと公開審査が行われました。各チームともメンバー全員がステージに登って、寸劇も交えながら提案したデザインの説明を行いました。

48時間デザインマラソンでは、これまで内容の濃い質の高いデザイン提案がなされてきましたが、特に今回は、今後展開を進めてすぐにも製品化できそうな高いレベルの提案もあるなど、これまで以上にリアリティー豊富な素晴らしい

ものでした。ユーザーの方々からは、「日常の問題を解決する想像力豊かなアイデアやそれを具体化するデザインのすごさを実感した。」「若いデザイナーの皆さんと一緒にワークショップを行い、その眼差しや発想に触れて現代の若者に対する認識を新たにした。」など、うれしい声が届いています。3日間の間に、各チームそれぞれにおいて様々なドラマが織りなされ、そこから実に見事なデザインとそのプレゼンテーションが行われました。そして、会場の聴衆による投票によって「ベストデザイン賞」、「ベストプレゼンテーション賞」が、審査員によって「チャレンジ賞」、「未来技術賞」、「チームシナジー賞」がそれぞれ選出されました。結果は以下の通りです。

- ◆**ベストデザイン賞**:Bチーム「Umami Dane」
(アイデア・コンセプト・デザインにおいて優秀であったチーム)
- ◆**ベストプレゼンテーション賞**:Dチーム「Side by Side」
(プレゼンテーションが優秀であったチーム)
- ◆**チャレンジ賞**:Cチーム「音で繋がる出会い」
(難しいテーマに果敢に挑戦したチーム)
- ◆**未来技術賞**:Aチーム「i-Tone」
(技術的な深い考察のもと、将来具現化できそうという視点で計画提案したチーム)
- ◆**チームシナジー賞**:Eチーム「KISEKI クレヨン」
(メンバーがそれぞれの役割を完遂し、「チーム全体の充実感と成果」に結びついたチーム)

表彰式の後、全員で振り返りの会を実施しました。今回のワークショップを通して感じた事をリーダー、ユーザー学生ボランティア、運営スタッフの其々の立場から話し合いました。最後に荒井先生から「皆さんは不安と期待感を持って集まったと思うが、実に豊かな人間関係のあるクリエーションの場で3日間を過ごされた。それは非常に貴重な機会であったと思う。今回のアウトプットは5つ全てが素晴らしい。そしてリアリティーのあるものを3日間でまとめあげた。」という言葉頂きました。

会場の静岡文化芸術大学に別れを告げ、ユーザー、リーダー、メンバー、学生ボランティア達は懇親会場へ移動。二日間ほぼ完徹というタフガイもいながら、中華料理を囲んでの懇親会は盛り上がりました。次回また機会があれば参加して今度こそベストデザイン賞を目指すという思いを全員が胸に秘め、一緒に頑張った仲間たちとはネットワークを組もうと携帯電話の番号を教えあって、浜松の駅からそれぞれの帰路につきました。



<UD 学習発表>

UD を勉強している浜松市内の小学校 4 年生の児童学による学習発表です。今回は浜松市立元城小学校、浜松市立佐藤小学校の 2 校から発表がありました。浜松市の全校で同じような授業が行われているそうです。

視覚障害の疑似体験や UD について調べたことを絵にしてまとめるなど、自らの気づきを大事にした授業内容がうかがわれました。発表の最後は発表者全員による手話を使いながらの歌が披露され、心の UD を大切にしていることがよく伝わってきました。



<UD コンサート&フィナーレ>

イベント最後のプログラムとして、浜松を中心に活動するジャズビッグバンド BLUE NOTES と三輪真由美さんのヴォーカルによるジャズナンバーやクリスマスソングのコンサートが行われました。フィナーレでは浜松特別支援学校ゴスペル部の生徒たちが加わって UD の優しい気持ちを伝えました。最後に来年の国際 UD 会議の案内がスクリーンに表示され、成川理事長や川原専務理事、川原事務局長も同ステージに上がって、国際会議への参加をアピールしました。(6 ページの本特集冒頭写真)

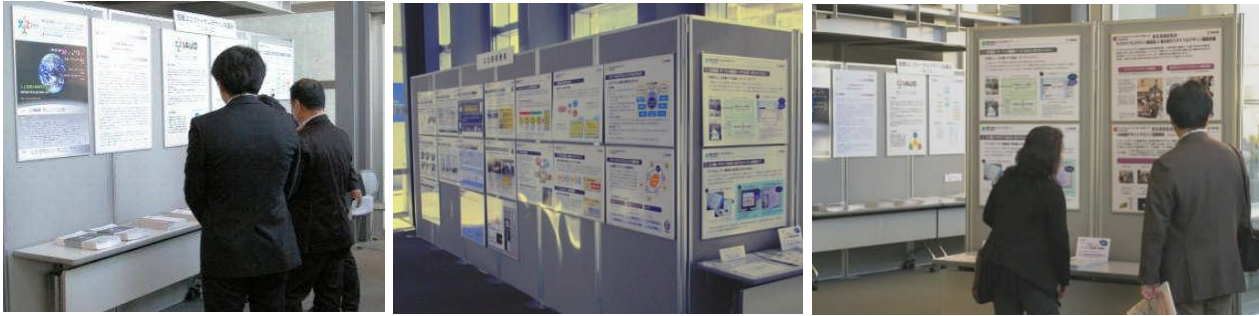


<展示・その他イベント> 12月4日(金)・5日(土)

メイン会場の講堂前ホワイエの様子



<IAUD 活動紹介のパネル展示>



<企業展示、UD 製品展示、学校・行政等のパネル展示、自助具展示など（21 社・団体）>





<その他>

講堂前のホワイエでは静岡茶の試飲コーナーも設けられ、プログラムの合間に参加者に供されました。また、浜松駅から会場の静岡文化芸術大学までの道のりでUDを探し、3か所以上のポイントを回ると景品がもらえる「街中ウォークラリー」や、小中学生を対象にキャンパス内にある身近なUDを体験する「UD探検ウォーク」など、幅広いプログラムが並行して開催されました。



<はままつ冬の蛍フェスタ>

浜松の冬の風物詩となっている「はままつ冬の蛍フェスタ」も協賛交流イベントとして11月14日からスタートしており、2010年1月10日まで開催されています。また、冬の蛍フェスタのテーマソング「冬の蛍」作者の川口直久スペシャルライブがキャンパス内の文化芸術研究センターで行われ、最終日のプログラムに彩りをそえました。



Case study: 余暇のUDプロジェクト

～ラリー・ゴールドバーグ氏記念研究会開催～

IAUD 余暇のUD プロジェクト

担当理事 大澤 隆男（株式会社日立製作所）

余暇のUDプロジェクトでは2007年より「テレビCMへ字幕を」をテーマに取り組んでまいりました。今回北米WGBH（ボストン公共放送）にて長年テレビ字幕に取り組んでこられた、ラリー・ゴールドバーグ氏が来日されたのを機会に、テレビ字幕に関する研究会を開催いたしました。この研究会へは日本民間放送連盟、日本アドタイザーズ協会、日本広告業協会といった関係団体をはじめ、放送局、広告代理店等さまざまな関係者の出席を得て、非常に活気あふれる研究会となりました。IAUD ニュースレターの場をお借りし、その報告を行いたいと思います。



■研究会概要

日時：2009年12月3日（木）15:30～17:30

場所：博報堂赤坂本社 13F プレゼンテーションルーム

<プログラム>

1. 挨拶 本研究会のねらい、IAUD 概要紹介

IAUD 余暇のUDPJ 担当の大澤隆男理事より、本研究会開催にあたり「米国の現状、世界の動向を知り、日本のCM字幕を一步でも実現へ向けて近づきたい。」という主旨と、IAUDの活動概要が紹介されました。

2. IAUD 余暇プロジェクトと活動紹介

余暇のUDPJメンバーの土屋亮介より、プロジェクトの紹介とCM字幕に関する研究活動の経緯が説明されました。



3. ラリー・ゴールドバーグ氏講演

米国における字幕放送の経緯やCMに関する字幕の現状、また、テレビ以外でのWebやエンターテイメント、教育系におけるアクセシブル研究の現状についてデモによるさまざまな事例を交えながらご教授いただきました。

<お話のポイント>

- ・WGBH（ボストン公共放送）の紹介と役割
- ・米国のクローズドキャプション(CC)に関する法律と普及の経緯
- ・ユーザーごとに選べるCCの表現手段メニューについて



- Web 上での動画コンテンツの字幕の現状と制作手段、CC の活用事例について
- エンターテイメント（テーマパーク、映画館、航空機）における情報保障の現状
- 放映する状況や語学学習に関する字幕の効果について
- CM 字幕（CC）における聴覚障害者コミュニティの反響
- モバイルメディア、子供向け教育用コンテンツのアクセシビリティの現状
- CM 関連団体の状況（全米広告協会、全米広告代理店協会はCMにCCを付けることを推奨）

※詳細は次ページの「ラリー・ゴールドバーグ氏講演の詳細」をご覧ください。

4. 質疑応答

質疑応答では、放送における手話による情報保障の現状、日本でのCM字幕の普及方法、字幕以外の米国で当たり前となっているUDの事例、米国では情報保障としてなぜ無条件にCCという方法をとったのか、日本でもCM字幕を実現したい聴覚障害者へのアドバイスは？といった活発な意見交換が行われました。

※詳細は24ページの「質疑応答の詳細」をご覧ください。



講師・略歴 ラリー・ゴールドバーグ氏 (Larry Goldberg)

WGBH（ボストン公共放送）メディアアクセス部門の代表として、同組織の各種メディアアクセスサービス各部門（キャプションセンター、映像の字幕同時表示サービス部門、研究開発部門）及び全米アクセシブルメディアセンターを統括する。1985年よりWGBHに参加し、これまでに障害を持つ人に対してアクセシブルなメディアをつくるための経営方針、技術、作業プロセスを発展させた。また、テレビ報道におけるキャプション普及につとめ、テレビデコーダ法（Television Decoder Circuitry Act of 1990）に当たって知見を提供している。米国において高まるデジタルテレビへのキャプション機能の発展に貢献し、電子工業会（EIA）においては、米国の次世代テレビにおけるキャプション機能のデザインを検討する作業部会を創設し、主宰した。2009年より、博報堂ユニバーサルデザインのアドバイザーボードメンバーをつとめている。



■ラリー・ゴールドバーグ氏講演の詳細

- WGBH 組織（ボストン公共放送）の紹介
- TV、ビデオ、DVD、映画、Web ベースなど多数に渡り字幕を提供

1973 年には字幕放送を開始

- 1973 年初めてオープンキャプション（OC）が付いたのは料理番組。その後、ニュースでもキャプションが付いた。当時はニュース後に 5 時間かけてキャプションを作成、5 時間後にオープンキャプションを付けて再放送した。



1980 年よりクローズドキャプションによる字幕放送

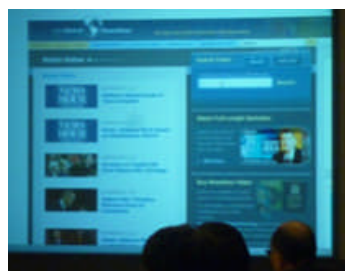
- 1980 年にはクローズドキャプション（CC）が導入された。CC は見ている人が ON/OFF できるのが特徴。
- デジタルテレビの進化により、CC は見た目もきれいになり、見る人の好みでメニューにより字幕の文字の大きさ、書体、色などを選べるようになった。
- 革新的なのは、Web 上でも CC を付けられるようになったこと。テレビ番組を Web 上でも見れる。テレビ番組にもともと字幕があるため、Web では安価に簡単に付けられる。
<http://video.pbs.org/video/1327194805/>



- Youtube という動画投稿サイトでは個人が字幕を付けられるように 2 つの手段を用意した。
 - ①動画と一緒に字幕を書き出し、一緒にアップする方法
 - ②google のリアルタイムに自動音声認識システムを使う方法（まだ精度としては高くはないが）
- インターネット上で動画にキャプションを使う画期的な理由。
 - キャプションの単語やテキストを、検索キーワードとして使えること。
 - たとえば「喉が渇いた」という言葉とマッチングしたページに清涼飲料水の CM をポップアップすることができる。



- 「News Hour」という番組サイトでは、もともと CC を作成しているので、これらのキーワードを使って検索をし、過去 10 年間の関連動画ニュースを検索することができるようになっている。
- 米で FLASH ビデオに CC を多言語化されていて、聴覚障害者はもちろん、スペイン語や他の国の人々へも情報保障となる。動画に CC を付けるソフトは WGBH からフリーダウンロードできる。
- Web ベースの会議システムでもキャプションの役割が広がっている。Adobe コネクトなど。聴覚障害者にタイピストがついていて、リアルタイムに複数人の発言表示が可能となっている。
- i-Tunes などモバイル映画用 CC ソフトを開発中。ダウンロードして PC や i-Phone で楽しめる。
- WGBH で販売する「Caption Keeper」というテレビの CC をネット上の CC フォーマットに変換可能。
- モバイルメディアを用いたキャプションも増えてきている。
- キャプションは他にも、状態によって役に立つことがある。
 - 音を出せない状況、ヘッドフォンを使いたくない時など。
- 個人的に興味があるのは航空機の中のメディア。国際線はとても長い時間を過ごすことになる。情報保障がないと、聴覚障害者はつままないと思う。そこで機内での映画などに字幕を付けるシステムを関連する企業や航空会社と検討している。

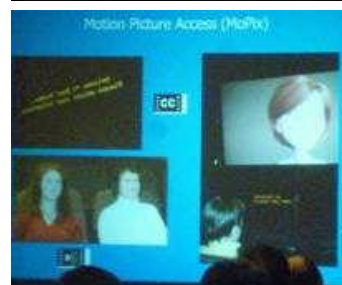


- エンターテインメントではウォルトディズニー社と、ディズニーランド、ディズニーワールドでアトラクションなどの情報を得られるモバイルを開発。ユーザーフレンドリーでボタン形状が全て異なる。視覚障害者、聴覚障害者に配慮。



- 映画館では、リアウインドウキャプションというシステムを全米で400箇所を導入している。映画館の後ろに鏡文字を表示、自分の席のカップホルダーに反射板となるガラスを設置すると、字幕を見ることができる。

<http://www.mopix.org/>



- 個人的にクローズドキャプションの使用法の共有をするため、コレクションをしている。字幕は聴覚障害者のためだけではなく、第二外国語として使われている。TVのクローズドキャプション機能の歴史として面白いのは、以前、特別な字幕チューナーを購入していたのは、英語を学ぶため日本人や韓国人だったということ。1996年に新たな法律ができて、全ての番組にCCを付けることになった。また、米国では、これらのキャプションが、バーや空港、トレーニングジムなど音量を上げられない場所でのTVに役立った。サンフランシスコでは特別な法律として、公共の場でTVを放映する場合は、CCを表示させなければならない。1985年代、広告代理店はCMに字幕を付けると、聴覚障害者は自分のために付けてくれていると思い、ロイヤルカスタマーになってくれることに気づいた。TVCMに字幕を付けなければならないという法律はない。(5分以上の番組が対象)聴覚障害者はどのCMに字幕が付いているか、チェックしており、スーパーボールの時期には、コミュニティで毎年、字幕が付いている、付いてないCMをリスト化してサイトで公表している。

<http://www.captions.com/>

- ANA (全米広告協会)、AAAA (全米広告代理店協会) では、CMにCCを付けることを企業に対し推奨している。
- 子供番組のCCでは、言葉にならないことも表示する。たとえば、叫び声や特殊な音響系、誰がしゃべっているかなど。
- 教育メディア関連では、教室・教育でも重要となってきた。教育系では、全てのコンテンツをアクセシブルにすることを目標に、聴覚障害者だけでなく、視覚障害者にも配慮する。教師は、Web上でコンテンツのアクセシビリティをメニューでON/OFFで選ぶこともできる。たとえば字幕がある、文字が大きい、写真を説明している、音声だけで全てを表現している、など。



■質疑応答の詳細

Q: 米国では、放送メディアでの手話の情報保障はどうなっているのか。

A: 以前、多くの番組で手話通訳を画面の中の一部に表示させていたこともあった。1980年以降、この方式は人気がなくなっていき、文字を表示させる方式を好む人が多く、今のところキャプションによる方式はスムーズに受け入れられている。CCのようにON/OFFできるタイプが米では求められている。もちろん、カナダやイギリスでも、何パーセントかは手話通訳で表示するという指針はある。手話の情報保障としては米では、教育や演説などの場で活躍する機会が多い。



Q: 日本でCM字幕が浸透していくとしたら、どのように浸透していくと予想されるか。

A: 日本の現状はよくわからないが、少なくとも米では、聴覚障害者のコミュニティが強い発信を続けている。最初、P&GがCM字幕を始めた。さまざまな人に情報を提供していきたい、というスタンスだった。米ではトヨタが提供する番組でCMに字幕がついているが、これはTV番組へのCCは当然なのだから、CMにもつけるのがむしろ自然なこと、と考えたという。もちろん、最初は苦戦した。そこでマーケティングでやるべきと考え、聴覚障害者にも協力してもらった。
また、多くの場合、消費者と直接つながりの深い企業が付けている傾向がある。ドーナツとか銀行など。

Q: 米ではCMに字幕は当たり前となっているようだが、他に日本にはなくて米では当たり前となっているようなUDはあるか。

A: まず、米では車いす対応の設備、建築物が当たり前のようにある。聴覚障害者のために、TTYという電話システムがある。これはタイピングによって相手とのコミュニケーションができるシステム（相手の声もオペレーターがタイピングして文字を返す）。また、点字が公共のものには全て付けるようになっている。

Q: 日本ではトレインチャンネルなどで企業CMが流れる。これは字幕というより、TVより少しテキストが付加されている少し特殊なオープンキャプションによるCM作りだと思う。米では、なぜ無条件にCCで提供するという方式になったのか。

A: キャプションで提供する上で重要なことは、さまざまな声による情報を文字にしている、ということ。米でも車内用のキャプションとかは広がっている。また、キャプションと違い、別の要素として、文字をデザインの一部として扱うこともあるだろう。

Q: 私は中途失聴。米では音声認識などを使って、字幕がまちがっても、どんどん流しているのがすばらしいと思う。日本では放送事故を恐れているのか、そういうのがなかなかできない。また字幕の表現手法を選べるのがすごい。私は15年間、CMに字幕が欲しいと言ってきた。聴覚障害者へのアドバイスは何かあるか。

A: まずはあなたのコメントに感謝を申しあげたい。
そして、そういった主張は、引き続き行って欲しい。
Dreams Come True! 「夢は実現しますよ！」
また、海外との意見交換もして欲しい。日本には実際、外資系企業もあるのだから、そういうチャンスもあるかと思う。



【UD2010 ウォッチング】

●論文要約（アブストラクト）の締め切りが迫っています！

昨月の浜松でのプレイヴェントも無事終了し、いよいよ会議開催の年が幕を開けました。論文受け付けも昨年10月からスタートしていますが、審査用の論文要約（アブストラクト）の締め切りが今月末と迫ってきていますので、応募を予定されている方はお早めをお願いします。

<論文募集 今後の予定>

- 1月31日 論文要約（アブストラクト）締め切り
- 2月1日～ 論文要約（アブストラクト）査読・審査
- 3月1日 審査結果通知、本論文要請（審査を通過した方々が対象）
- 5月31日 本論文締め切り
- 6月1日～ 本論文査読
- 7月15日～ 査読結果通知・本論文修正依頼
- 8月31日 すべての原稿締め切り
- 10月30日～ 11月3日 国際会議にて発表

●開催年を迎え実行委員会の動きもさらにヒートアップ。

浜松のプレイヴェントには国際 UD 会議の実行委員を務められる理事の皆さんも数多く参加されました。プレイヴェントで研究開発企画部会や 48 時間デザインマラソンの発表を聞いたり、IAUD 紹介パネルや企業展示を見て、来場者の現場の反応を感じることで、国際会議の実感をつかんで、実行委員会での企画作業もより具体的な段階に入っていきます。各担当委員による部門別ミーティングが引き続き開催されます。また、今後、企業協賛などの勧誘活動がさらに強化されてゆく予定です。

なお、次回理事会は1月26日（火）に住友スリーエム（株）で開催が予定されています。

●国際 UD 会議の情報保障を検討中です。

これまで国際 UD 会議では多様な参加者に対し、手話や和英の同時通訳、補聴器の磁気ループ、さまざまな方式での字幕付けなど幅広い情報保障サービスを提供してきました。音声認識技術を活かした同時字幕システムなど、いち早く新しい技術なども取り入れ、会議参加者へのサービス提供という本来の目的だけでなく、新しい技術の普及を支援しようという視点も含まれています。

IAUD 事務局と情報交流センターで協力し、今年の国際会議においても、より質の高いサービスが提供できるよう、いろいろな可能性を検討しています。例えば法廷で使用されている速記タイプを電子化した電子速記システムなどもそのひとつです。パソコンによる要約筆記と比較し、入力スピードは数倍、反訳精度も大変優れています。法廷記録として機械式の速記タイプはこれまで日本でも使われてきました。しかし、速記官の養成が1997年に停止されると、先進国の裁判記録ではスタンダードとなっている最新の電子速記システムが、日本では使用は許可はされているものの、法廷での記録システムとして公式に認められていないため、ボランティアでソフト開発が行われ、米国製の50～60万円もする高価な機器を、速記官の方が自前で購入せざるを得ないという問題も抱えています。

国際会議での体制の具体的な検討はまだこれからですが、情報保障サービスの提供というだけでなく、普段はあまり表には見えてこない課題も含めて、地道な取り組みの紹介や活動をお手伝いをするこも、UDの会議のひとつの役割ではないかと考えています。



電子速記タイプ
Stentura

【編集後記】○明けまして、おめでとうございます。今年は秋に国際会議が予定されており、会員の皆様をはじめ多くの方々のお世話になるものと思います。IAUD 情報交流センターも活動のさらなる強化が必要であると、センター員皆が心に銘じております。これまで以上によりしくお願いいたします。

さて2010年は、かつて大騒ぎになったパソコンの2000年問題ほどではないけれど、少し面白い問題が出てくる可能性があると言われております。それも日本だけの現象と言えるかも知れません。年数を口に出して言うか表記する場合、これまでは西暦と和暦が混在していても区別ができていたのですが、今年からはお互いに注意が必要になってきます。例えばこれまで、「09年」は「2009年」であり、「9年」は「平成9年」と区別ができていました。それが今年からは「10年」といっても、平成10年なのか2010年なのか区別ができなくなります。2010年（平成22年）と平成10年（1998年）は12年の差がありますので、前後の文脈から判断すれば区別できることではあります。しかしビジネス文書などでは、あらぬ誤解を避けるためにも省略せずに表記したほうが間違いのないでしょう。さらに一歩進め、表記は西暦か和暦かを統一することが必要になってくるのかも知れません。（矢）

○いよいよ国際UD会議開催の年が幕を明けました！ところで、先月開催された余暇のUDPJ主催の研究会ではCM字幕について米国の最新情報が紹介され、浜松のプレイヴェントでもパソコン要約筆記による字幕が使われていました。Newsletterの取材でもたくさん写真を撮ってきましたが、最近、字幕が使われている講演会などで写真を撮るときは、必ず字幕スクリーンをフレームに入れたカットを字幕の内容にも注意しながら撮るように心がけています。効用はいくつかありますが、どのような内容の話だったかメモ代わりにすることがその一つです。さらに大きなことは、実際に誌面で掲載すると、字幕の内容がそのまま読者の皆さんにそのシーンを伝える字幕として役立つということです。その場合には画面中の文字サイズなどにも注意を払いますし、本当に重要なところは本文中で記述しますが、より臨場感のある生な情報としてできるだけ活かすようにしています。ジョークやダジャレなど記事の中だと冗長となってしまうところも、写真の片隅にチラッと見るとアイスブレイクとかスパイスとしてお楽しみいただけるのではという密かな期待もあります。ささいな遊び心ですがそんなところも見ていただけると嬉しいです。今年もよろしくお願いいたします。（葛）

IAUD Newsletterでは、誌面を会員の皆さまのUDに関わる情報交換の場と位置づけています。ぜひ、会員企業のUD商品開発事例やPJ/WGの活動成果事例等の情報をお寄せください。また、国内外のUD関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。ご連絡は、news@iaud.netへ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter vol.2 No.10
2010年1月12日発行
国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局 : 225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110
電話: 045-901-8420 FAX: 045-901-8417
e-mail: info@iaud.net
情報交流センター: 104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9
(IAUD サロン) トヨタ八丁堀ビル 4階
電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847
e-mail: salon@iaud.net